



表1 主要通貨の強弱感を月次で測定してみると

Table with columns for currency (USD, EUR, GBP, JPY) and ranking (1st to 5th) from 2005.6 to 2007.7.

(出所)筆者作成

米ドル二辺倒から 分散投資へ

上場している株式の時価総額を、ユーロ市場のそれが抜いたことだ。いずれも、米ドルの基礎通貨としての覇権が徐々に弱体化し始めていることを示す。...

こうした状況をさらに鮮明に示すのが、いまや個人投資家に急激に浸透し始めた投資信託が保有する外貨の種類別推移だ。国内で運用されている公募タイプの投資信託は5月末時点で78兆5000億円だが、うち外貨建て資産は33兆4500億円。外貨全体に占める米ドルは12兆7900億円だが、そのシェアは38.2%。ところがこれからさかのぼる5年半前の01年末には、45兆2800億円の外貨全体で保有する外貨資産が3兆7800億円で8.3%、このうち米ドルのシェアが59.7%を占めており、5年半前に比べて米ドル建て資産の比率が急減していることが分かる。...

表2 国内投資信託の通貨(国)別資産運用状況(上位10傑)

Table showing asset management status for domestic investment trusts by currency/country (USD, EUR, GBP, JPY) for 01, 02, and 03 years ending in May.

(出所)投資信託協会

投資のツボ

マクロ経済データを投資に生かす法

家計資産でも、米ドル二辺倒の時代は 終わりつつある

「今週は週初からやや円高が進んだ」との報道に接して、われわれは普段、おそらく多くの読者の方々は、「そりゃ、もちろん対米ドルで話でしょ」とおっしゃると思う。と同時に「それがどうかしたの？」とげんなりな面持ちで問い返される方も少なくないであろう。

ここに私は多くの日本人が持つ国際感覚の希薄さを感じる。複数の国と国境を接しているヨーロッパや多くのアジア諸国の人々とは異なり、為替相場に対するあまりにもプリマチュア(未熟)な感覚を感じるのがある。

ニューヨークはセントラルパークわきのスターバックスで、スーツをまとったサラリーマンがいきなり「米ドル高」と傍らの同胞に話し始めたとしても、聞いた側は「ハハ」とは言わない。必ず「ところで君はどの通貨に対する米ドルの動きにつ

いて話しているんだい」と聞くはずだ。ニューヨークにとって、米ドルの価値を計る尺度は決まっていない。ニューヨーク市場において対米ドルで取引量の多い順で言えば、ユーロ、日本円、英ポンドの順になるが、一般にはこれらの通貨に対して米ドルが同方向に進むケースは少ない。「米ドルは」ユーロに対しては下げたが豪ドルに対しては強かった」とか「カナダドルに対しては上げたが中国人民元に対してはやや下げた」というようにだ。嘘だと思っただけなら、身近にいる外国人に聞いてみればいい。

為替相場では 「どの通貨に対してか」を見る 考えてみれば、これは日本円についても同じこと。表1は2005年6月以降の東京外国為替市場における、各月の通貨の強弱感を示したのも

のだ。日本円が上昇率ランキングの左右の端に位置している時期は「円があらゆる通貨に対して上げた」ことを示す。が、それ以外の時期は○にに対しては上げたが△△に対しては下げた」なのだ。例えば、05年6月であれば「円はユーロに対しては強かったが米ドルには弱かった」であり、07年3月であれば「円は米ドルに対しては上げているが豪ドルに対しては下げている」のだ。であれば、私たちは今や「えんやす」とか「えんだか」といった4文字で為替相場を認識することからは脱却した方がいい。そうでなければ、米ドル二辺倒の時代から急速に多通貨投資へ急転回している昨今の投資環境を読むことはできないだろう。昨年からは今年初めにかけて、国際金融市場でユーロ通貨が着実に米ドルの地位を脅かされ始めていることが相次いで報道された。1つは、現金として流通している通貨の量においてユーロが米ドルを凌駕するに至ったことだ。2つめには、米国市場に

その8